

大学生における過去のいじめに関する経験と現在の精神的健康との関連

横浜国立大学大学院教育学研究科

渡邊 健蔵

横浜国立大学教育学部

堀井 俊章

問 題

いじめは、児童生徒が学校生活を送る上で、誰にでも起こる可能性がある。文部科学省（2019）の調査において、いじめの認知件数は小学校で425,844件、中学校で97,704件、高等学校（以下、高校とする）で17,709件であり、全体の認知件数は5年連続で増加している。加えて、いじめの認知件数は学校から報告された件数であり、実際にはいじめがそれ以上に多く存在する可能性もある。また、いじめの構造は、いじめた子・観衆・傍観者・いじめられる子で成り立っているとされており（森田, 2010; 森田・清水, 1994）、観衆・傍観者という立場にいる児童生徒もいじめに大きく影響している。加えて、本間（2008）は、現代のいじめにおいて、いじめ被害の対象は変化しやすく、加害者や傍観者の立場にいた者でさえも、被害者へと変化する可能性があるとして述べている。

このように多くの生徒の関与するいじめの被害経験が長期的な影響を及ぼすことが明らかにされている。松本ら（2014）は、過去のいじめ経験が大学生の精神的健康を悪化させることを明らかにしている。三島（2008）は、親しい友人からいじめられた経験が、後の友人関係に対する不安・懸念に影響することを明らかにしている。また、坂西（1995）は、過去にいじめの被害を経験している者はいじめの被害体験が強いほど、体に不調を感じる事が多くなったり、活動意欲が低下したりといった影響があることを明らかにしている。他にも、水谷・雨宮（2015）は、中学生の頃はいじめの被害経験が特性不安に影響を与えていることや、小学生の頃はいじめの被害が自尊感情を介して大学生の主観的幸福感に影響を与えていることを明らかにしている。

また、いじめの被害経験だけでなく、いじめの加害経験が精神的な影響を及ぼすことを示唆する研究も報告さ

れている。岡安・高山（2000）は、いじめの被害経験のある者だけでなく、いじめの加害経験のある者も無気力や怒りといった心理的ストレスのレベルが高いことを示唆している。他にも、Copeland, Wolke, Angold, & Costello（2013）は、いじめの被害経験及び加害経験が、抑うつ障害やパニック障害・反社会性パーソナリティ障害等の精神疾患の可能性を高めることを示唆している。さらに、Sigurdson, Wallander, & Sund（2014）は、青年期のいじめの加害経験が、後の職業機能の低下や違法薬物の使用の危険性を高めることを示唆している。

以上から、いじめの被害経験のみならず、いじめの加害経験が長期的な関連を示す可能性が示唆されている。しかし、いじめの観衆経験・傍観経験が長期的な関連があることを示す研究は、ほとんど見られない。

ところで、森田・清水（1994）は、「加害者」「被害者」「観衆」「傍観者」という4層構造において、「観衆」と「傍観者」がいじめを助長したり、抑止したりする重要な要素であると述べている。加えて、森田（2010）によれば、学級において「傍観者」のなかから「仲裁者」が現れるか、直接止めに入らなくても否定的な反応を示すことで「加害者」への抑止力になる。このように、「観衆」や「傍観者」という存在が、いじめを解決する上で重要な存在である。しかし、この「観衆」と「傍観者」の立場にいる者の心理状態は、一様ではなく、抑止力になる存在としてのみ捉えるのは浅薄である。藤沢（2020）は、「観衆」には、加害者に加担しなければ自分が被害者になることを予測していじめに関与している者や単純にいじめを楽しむ者がいると述べている。また、「傍観者」に関しては、加害者に心情的に味方をしている者やいじめが悪いとわかっている者、無関心で自分とは関係ないと考えている者で分けられると述べている。加えて、桂田（2000）は、過去にいじめを傍観していた者の多くが、いじめに介入しなかったことに後悔していることを

大学生における過去のいじめに関する経験と現在の精神的健康との関連

示唆している。これにより、いじめの観衆経験や傍観経験をした者が後悔を持っている可能性が考えられる。

Roese et al. (2009) は、後悔が不安や抑うつといった精神的健康に正の関連を示すことを明らかにしている。そのため、後悔は、精神的健康に関連を示す可能性があり、いじめの観衆経験や傍観経験が精神的健康に関連を示す可能性がある。

以上から、いじめの被害経験・加害経験のみではなく、いじめの観衆経験・傍観経験にまで焦点を当て、長期的な関連を検討することは、いじめに間接的にかかわっている生徒への支援の必要性を考える上で重要である。

そこで、本研究では、大学生を対象に中学校及び高校在籍時のいじめに関する経験と精神的健康との関連を検討する。文部科学省 (2019) によると、いじめの認知件数は小学校が最も多いが、いじめ防止対策推進法によって規定されている「重大事態」の発生件数は中学校において最も多くなっている。そのため、中学校においていじめが最も悪質化している可能性が考えられる。また、高校生を対象にしたいじめに関する経験の検討はこれまであまり行われていないが、高校においてもいじめは発生している。そのため、中学校及び高校のいじめ問題を検討することは重要である。

本研究において、以上のような検討を行うにあたり、性差の観点を考慮する必要がある。Crick & Grotpeter (1995) は、男子は、他者に対する身体的暴力や暴言である外顯的攻撃を、女子は意図的に友人関係を操作したり傷つけたりする関係性攻撃を多く行う傾向があることを明らかにしており、関係性攻撃を行う者は、抑うつや孤独感などの不適応と関連することを示している。また、Slee (1995) は、男女別にいじめ経験と精神的健康との関連を検討し、男子は、いじめ被害経験が精神的健康に関連を示すのに対し、女子はいじめ被害経験だけでなく、いじめ加害経験も精神的健康に関連を示すことを明らかにしている。

このように、いじめに関して性差が見られていることを考慮すると、いじめに関する経験と精神的健康との長期的な関連を検討する上で、性差の観点を踏まえることが重要である。そのため、本研究では、性差も併せて検討を行う。

なお、いじめ問題の渦中にある時よりも、大学生になった現在の方が時間的・心理的に距離をおいて自己の体験を見ることが出来る (坂西, 1995)。そのため、本研

究においても大学生を対象に回顧法を用いて検討を行う。

目 的

本研究では、大学生への回顧法を取り入れ、中学校及び高校に在籍していた当時のいじめに関する経験と大学に在籍する現在の精神的健康との関連を検討することを目的とする。

方 法

調査対象者

首都圏 A 大学及び B 大学に所属する大学生 140 名 (男性 72 名, 女性 68 名) を対象に、2019 年 6 月に調査を実施した。

手続き

本調査は以下の説明を文書及び口頭で行い、同意を得た者を対象に実施した。すべての回答は数量化され統計的処理をするため個人のプライベート情報は守られること、回答は研究以外の目的には使用しないこと、研究終了後は個人の回答を調査者が責任をもって処分すること、参加は自由であり決して強制ではなく研究への参加を途中で中止したいと思った場合にはいつでも中止することができることである。調査は、集団・無記名式であり、回答時間は 5 分～15 分であった。

質問紙の構成

①フェイスシート

学年と性別、年齢について記入を求めた。

②中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ加害経験尺度

文部科学省 (2019) の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果について」において提起されているいじめの態様を参考に、中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ加害経験の程度を測るための尺度 (各 8 項目) を構成した。

③中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ観衆経験尺度

いじめの態様 (文部科学省, 2019) を参考に、中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ観衆経験の程度を測るための尺度 (各 8 項目) を構成した。

④中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ傍観経験尺度

いじめの態様 (文部科学省, 2019) を参考に、中学校

大学生における過去のいじめに関する経験と現在の精神的健康との関連

在籍時及び高校在籍時のいじめ傍観経験の程度を測るための尺度（各8項目）を構成した。

⑤中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ被害経験尺度

いじめの態様（文部科学省，2019）を参考に，中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ被害経験の程度を測るための尺度（各8項目）を構成した。

②～⑤の各項目に対する回答は、「まったくなかった」「たまにあった」「ときどきあった」「よくあった」の4件法で，それぞれの得点を0～3点として，各尺度の合計得点を求めた。各尺度の合計得点の最小値及び最大値は，0～24点であった。得点が高いほど，当時の学校在籍時のいじめに関する経験の程度が高いことを意味する。

⑥精神健康調査票の日本語版 GHQ-28（以下 GHQ-28）（中川・大坊，1985）

GHQ-28は，精神的健康度を測るために作成されたものである。やうつ傾向・不安と不眠など，広範囲の精神症状を測定することができる（中川・大坊，1985）。この尺度は，「身体的症状」（項目例「病気だと感じたことは」に対して「まったくなかった」「あまりなかった」「あった」「たびたびあった」の選択肢から一つの回答を求める），「不安と不眠」（項目例「夜中に目を覚ますことは」に対して「まったくなかった」「あまりなかった」「あった」「たびたびあった」の選択肢から一つの回答を求める），「社会的活動障害」（項目例「いつもより何かするのに時間がかかることが」に対して「まったくなかった」「いつもと変わらなかった」「あった」「たびたびあった」の選択肢から一つの回答を求める），「うつ傾向」（項目例「人生にまったく望みを失ったと感じたことは」に対して「まったくなかった」「あまりなかった」「あった」「たびたびあった」の選択肢から一つの回答を求める）の4つの下位尺度（全28項目）で構成されている（4件法）。それぞれの得点を0～3点として，各下位尺度の合計得点を求めた。各下位尺度の合計得点の最小値及び最大値は，0～21点であった。得点が高いほど精神的健康度が低いことを意味する。

結 果

中学校在籍時及び高校在籍時の各いじめ経験尺度の構造及び信頼性

中学校在籍時のいじめ加害経験尺度（以下，中学加害とする）及び高校在籍時のいじめ加害経験尺度（以下，

高校加害とする）について，各8項目に対してそれぞれ主成分分析を行った（Table 1）。

次に，中学校在籍時のいじめ観衆経験尺度（以下，中学観衆とする）及び高校在籍時のいじめ観衆経験尺度（以下，高校観衆とする）について，各8項目に対してそれぞれ主成分分析を行った（Table 2）。

次に，中学校在籍時のいじめ傍観経験尺度（以下，中学傍観とする）及び高校在籍時のいじめ傍観経験尺度（以下，高校傍観とする）について，各8項目に対してそれぞれ主成分分析を行った（Table 3）。

次に，中学校在籍時のいじめ被害経験尺度（以下，中学被害とする）及び高校在籍時のいじめ被害経験尺度（以下，高校被害とする）について，各8項目に対してそれぞれ主成分分析を行った（Table 4）。

その結果，いずれの尺度においても，第1主成分の負荷量は約.40以上，第1主成分の寄与率は，約40%以上と比較的高い値を示したことから，各尺度は，単一次元からなることが確認された。また，Cronbachの α 係数は.79～.92を示し，十分な信頼性（内的整合性）をもつことが確認された。

GHQ-28の信頼性

GHQ-28は，先行研究と同一の尺度構成を採用し，下位尺度ごとに α 係数を求めた結果， α 係数は.66から.92を示し，一定水準以上の信頼性（内的整合性）をもつことが確認された（Table 5）。

Table 1 中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ加害経験尺度の主成分分析の結果

項 目	第1主成分の負荷量	
	中学加害	高校加害
1 私は，周りの子に，冷やかしかからかい，悪口や脅し文句，嫌なことを言ったことがある。	.57	.38
2 私は，周りの子に，仲間はずれ，集団による無視をしたことがある。	.62	.75
3 私は，周りの子に，軽くぶつかったり，遊ぶふりをしてたいたり，蹴ったりしたことがある。	.71	.78
4 私は，周りの子に，ひどくぶつかったり，たたいたり，蹴ったりしたことがある。	.79	.86
5 私は，周りの子に，金品をたかったことがある。	.70	.77
6 私は，周りの子に対し，金品を隠したり，盗んだり，壊したり，捨てたりしたことがある。	.59	.84
7 私は，周りの子に，嫌なことや恥ずかしいこと，危険なことをしたり，させたりしたことがある。	.72	.74
8 私は，周りの子に，パソコンや携帯電話等で，ひぼう・中傷や嫌なことをしたことがある。	.63	.38
寄与率 (%)	44.6	50.4

大学生における過去のいじめに関する経験と現在の精神的健康との関連

Table 2 中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ観衆経験尺度の主成分分析の結果

項目	第1主成分の負荷量	
	中学観衆	高校観衆
1 周りの子が、冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われているのを、私は、はやしたてたり、面白がったりしたことがある。	.62	.61
2 周りの子が、仲間はずれ、集団による無視をされているのを、私は、はやし立てたり、面白がったりしたことがある。	.79	.63
3 周りの子が、軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりしているのを、私は、はやし立てたり、面白がったりしたことがある。	.85	.79
4 周りの子が、ひどくぶつかられたり、たたかれたり、蹴られたりしているのを、私は、はやし立てたり、面白がったりしたことがある。	.86	.88
5 周りの子が、金品をたかられているのを、私は、はやし立てたり、面白がったりしたことがある。	.80	.72
6 周りの子が、金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりしているのを、私は、はやし立てたり、面白がったりしたことがある。	.81	.79
7 周りの子が、嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりしているのを、私は、はやし立てたり、面白がったりしたことがある。	.86	.77
8 周りの子が、パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされているのを、私は、はやし立てたり、面白がったりしたことがある。	.67	.65
寄与率 (%)	62.0	54.2

Table 3 中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ傍観経験尺度の主成分分析の結果

項目	第1主成分の負荷量	
	中学傍観	高校傍観
1 周りの子が、冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われているのを見たり聞いたりしたことがある。	.63	.61
2 周りの子が、仲間はずれ、集団による無視をされているのを見たり聞いたりしたことがある。	.72	.81
3 周りの子が、軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりしているのを見たり聞いたりしたことがある。	.77	.78
4 周りの子が、ひどくぶつかられたり、たたかれたり、蹴られたりしているのを見たり聞いたりしたことがある。	.84	.81
5 周りの子が、金品をたかられているのを見たり聞いたりしたことがある。	.64	.58
6 周りの子が、金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりしているのを見たり聞いたりしたことがある。	.69	.60
7 周りの子が、嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりしているのを見たり聞いたりしたことがある。	.78	.75
8 周りの子が、パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされているのを見たり聞いたりしたことがある。	.64	.70
寄与率 (%)	51.5	50.7

Table 4 中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ被害経験尺度の主成分分析の結果

項目	第1主成分の負荷量	
	中学被害	高校被害
1 私は、周りの子に、冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われたことがある。	.64	.56
2 私は、周りの子に、仲間はずれ、集団による無視をされたことがある。	.77	.61
3 私は、周りの子に、軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりしたことがある。	.60	.71
4 私は、周りの子に、ひどくぶつかられたり、たたかれたり、蹴られたりしたことがある。	.61	.87
5 私は、周りの子に、金品をたかられたことがある。	.60	.78
6 私は、周りの子に対し、金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりしたことがある。	.78	.86
7 私は、周りの子に、嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりしたことがある。	.68	.66
8 私は、周りの子に、パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされたことがある。	.55	.40
寄与率 (%)	43.1	48.7

各いじめ経験尺度と GHQ-28 の相関

各いじめ経験尺度と GHQ-28 の相関を検討するために、Pearson の相関係数を用いて、尺度間の相関分析を行った (Table 5)。

相関分析の結果、いじめ経験尺度の中学加害は、GHQ-28 の「身体的症状」と有意な正の相関を示し ($r=.20$, $p<.05$) を示し、「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=.23$, $p<.01$) を示した。次に、中学観衆は「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=.19$, $p<.05$) を示した。中学傍観は、 $p<.01$ を示した。次に、中学観衆は「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=.19$, $p<.05$) を示した。中学傍観は、「身体的症状」と有意な正の相関 ($r=.18$, $p<.05$) を示し、「不安と不眠」と有意な正の相関 ($r=.25$, $p<.01$) を示し、「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=.34$, $p<.001$) を示した。そして、中学被害は、「不安と不眠」と有意な正の相関 ($r=.18$, $p<.05$) を示し、「社会的活動障害」と有意な正の相関 ($r=.21$, $p<.05$) を示し、「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=.38$, $p<.001$) を示した。

いじめ経験尺度の高校傍観は、「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=.17$, $p<.05$) を示した。そして、高校被害は、「社会的活動障害」と有意な正の相関 ($r=.19$, $p<.05$) を示し、「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=.19$, $p<.05$) を示した。

大学生における過去のいじめに関する経験と現在の精神的健康との関連

各いじめ経験尺度と GHQ-28 の重回帰分析

中学校及び高校に在籍していた当時のいじめ経験と大学に在籍する現在の精神的健康との関連を検討するため、いじめ経験尺度を独立変数、GHQ-28 を従属変数とした、重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。重回帰分析の結果を Table 6 に示す。なお、多重共線性の問題がないことは確認されている。

重回帰分析の結果、いじめ経験尺度の中学加害が GHQ-28 の「身体的症状」と有意な正の関連 ($\beta=0.20$, $p<0.05$) を示した。また、中学傍観が「不安と不眠」と有意な正の関連 ($\beta=0.25$, $p<0.01$) を示し、「うつ傾向」と有意な正の関連 ($\beta=0.21$, $p<0.05$) を示した。そして、中学被害が「社会的活動障害」と有意な正の関連 ($\beta=0.21$, $p<0.05$) を示し、「うつ傾向」と有意な正の関連 ($\beta=0.29$, $p<0.05$) を示した。

各いじめ経験尺度と GHQ-28 の性差

各いじめ経験尺度と GHQ-28 について性差の検討を行うために、各いじめ経験尺度と GHQ-28 の各下位尺度を用いて t 検定を行った。以下、Table 7 に t 検定の結果を示す。

その結果、各いじめ経験尺度では、中学加害は男子の得点が女子より有意に高く ($t=5.66$, $p<0.001$)、中学観衆は男子の得点が女子より有意に高く ($t=6.63$, $p<0.001$)、中学傍観は男子の得点が女子より有意に高く ($t=3.67$, $p<0.001$)、中学被害は男子の得点が女子より有意に高いことが示された ($t=2.59$, $p<0.05$)。加えて、高校加害は男子の得点が女子より有意に高く ($t=4.45$, $p<0.001$)、高校観衆は男子の得点が女子より有意に高く ($t=4.97$, $p<0.001$)、高校傍観は男子の得点が女子より有意に高く ($t=4.20$, $p<0.001$)、高校被害は男子の得点が女子より有意に高いことが示された ($t=3.26$, $p<0.01$)。また、GHQ-28 では、「社会的活動障害」は男子の得点が女子より有意に高いことが示された ($t=2.30$, $p<0.05$)。

男女別の各いじめ経験尺度と GHQ-28 の相関

男女別に GHQ-28 と各いじめ経験尺度の相関を検討するために、Pearson の相関係数を用いて、男女別に尺度間の相関分析を行った。男子の結果を Table 8 に示し、女子の結果を Table 9 に示す。

男子において、中学加害は GHQ-28 の「身体的症状」と有意な正の相関 ($r=0.26$, $p<0.05$) を示し、「うつ傾向

と有意な正の相関 ($r=0.28$, $p<0.05$) を示した。中学観衆は GHQ-28 の「身体的症状」と有意な正の相関 ($r=0.23$, $p<0.05$) を示した。次に、中学傍観は GHQ-28 の「身体的症状」と有意な正の相関 ($r=0.26$, $p<0.05$) を示し、「不安と不眠」と有意な正の相関 ($r=0.37$, $p<0.01$) を示し、「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=0.33$, $p<0.01$) を示した。そして、中学被害は GHQ-28 の「身体的症状」と有意な正の相関 ($r=0.28$, $p<0.05$) を示し、「不安と不眠」と有意な正の相関 ($r=0.31$, $p<0.01$) を示し、「社会的活動障害」と有意な正の相関 ($r=0.25$, $p<0.05$) を示し、「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=0.55$, $p<0.001$) を示した。また、高校傍観は GHQ-28 の「身体的症状」と有意な正の相関 ($r=0.24$, $p<0.05$) を示し、高校被害は「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=0.27$, $p<0.05$) を示した。

女子において、中学加害は GHQ-28 の「身体的症状」と有意な正の相関 ($r=0.31$, $p<0.01$) を示し、「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=0.25$, $p<0.05$) を示した。中学観衆は GHQ-28 の「身体的症状」と有意な正の相関 ($r=0.31$, $p<0.01$) を示し、「不安と不眠」と有意な正の相関 ($r=0.28$, $p<0.05$) を示し、「社会的活動障害」と有意な正の相関 ($r=0.27$, $p<0.01$) を示し、「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=0.37$, $p<0.01$) を示した。中学傍観は「うつ傾向」と有意な正の相関 ($r=0.39$, $p<0.01$) を示した。

男女別の各いじめ経験尺度と GHQ-28 の重回帰分析

各いじめ経験尺度を独立変数、GHQ-28 を従属変数とし、重回帰分析（ステップワイズ法）を男女別に行った。重回帰分析の結果を Table 10 に示す。なお、多重共線性の問題がないことは確認されている。

男子では、中学傍観が GHQ-28 の「不安と不眠」と有意な正の関連 ($\beta=0.37$, $p<0.01$) を示した。中学被害は GHQ-28 の「身体的症状」と有意な正の関連 ($\beta=0.28$, $p<0.05$) を示し、「社会的活動障害」と有意な正の関連 ($\beta=0.39$, $p<0.01$) を示し、「うつ傾向」と有意な正の関連 ($\beta=0.55$, $p<0.001$) を示した。また、高校加害は「社会的活動障害」と有意な負の関連 ($\beta=-0.31$, $p<0.05$) を示した。女子では、中学加害が GHQ-28 の「身体的症状」と有意な正の関連 ($\beta=0.31$, $p<0.05$) を示した。中学観衆は「不安と不眠」と有意な正の関連 ($\beta=0.28$, $p<0.05$) を示し、「社会的活動障害」と有意な正の関連 ($\beta=0.27$, $p<0.05$) を示した。また、中学傍観は「うつ傾向」と有意な正の関連 ($\beta=0.39$, $p<0.01$) を示した。

大学生における過去のいじめに関する経験と現在の精神的健康との関連

Table 5 各いじめ経験尺度と GHQ-28 の相関分析, 基礎統計量, α 係数の結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1.身体的症状	8.77	3.78	.68											
2.不安と不眠	8.34	3.76	.76	.48***										
3.社会的活動障害	8.01	2.86	.66	.23**	.38***									
4.うつ傾向	5.10	4.72	.92	.34***	.59***	.50***								
5.中学加害	1.81	2.72	.80	.20*	.06	.12	.23**							
6.中学観衆	6.71	4.91	.92	.16	.10	.10	.19*	.73***						
7.中学傍観	2.29	3.46	.86	.18*	.25**	.09	.34***	.48***	.52***					
8.中学被害	2.14	2.77	.79	.16	.18*	.21*	.38***	.44***	.25**	.44***				
9.高校加害	2.29	3.22	.81	.08	.04	-.02	.13	.62***	.52***	.35***	.47***			
10.高校観衆	0.94	1.95	.87	.07	.01	.00	.13	.65***	.66***	.35***	.36***	.76***		
11.高校傍観	0.91	2.13	.85	.12	.14	.06	.17*	.49***	.46***	.44***	.46***	.64***	.78***	
12.高校被害	1.09	2.29	.80	.12	.08	.19*	.19*	.32***	.28**	.23**	.69***	.61***	.48***	.53***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table 6 各いじめ経験尺度と GHQ-28 の重回帰分析の結果

各いじめ 経験尺度	GHQ-28			
	身体的症状	不安と不眠	社会的 活動障害	うつ傾向
	β	β	β	β
中学加害	.20*			
中学傍観		.25**		.21*
中学被害			.21*	.29**
R^2	.04*	.07**	.04*	.18***
Adj R^2	.03*	.06**	.04*	.17***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$ β : 標準偏回帰係数

R^2 : 決定係数 Adj R^2 : 自由度調整済み決定係数

考 察

過去のいじめ経験と現在の精神的健康の関係

中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ経験と精神的健康の関係について、重回帰分析の結果、中学加害が現在の「身体的症状」と、中学被害が現在の「社会的活動障害」及び「うつ傾向」と有意な正の関連を示した。これらの関係は相関分析においても有意であった。これは、先行研究と一致する結果であった (Copeland et al., 2013; 水谷・雨宮, 2015; 岡安・高山, 2000)。坂西 (1995) は、いじめの被害経験がある者は9割が小中学校でいじめを経験しており、被害経験のある者ほど、活動意欲が低下していることを示唆している。また、岡安・高山

Table 7 各いじめ経験尺度と GHQ-28 の性差

各いじめ経験尺度	男子		女子		<i>t</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
中学加害	3.31	3.31	0.91	1.12	5.66***
中学観衆	3.93	4.09	0.54	1.03	6.63***
中学傍観	8.13	5.38	5.21	3.87	3.67***
中学被害	2.38	3.27	1.21	1.81	2.59*
高校加害	1.61	2.49	0.24	0.55	4.45***
高校観衆	1.96	2.91	0.18	0.54	4.97***
高校傍観	3.33	3.87	1.18	1.80	4.20***
高校被害	1.46	2.77	0.32	0.78	3.26**
GHQ-28					
身体的症状	8.60	3.52	8.96	3.24	-0.63
不安と不眠	7.99	3.80	8.72	3.72	-1.16
社会的活動障害	8.54	3.18	7.44	2.42	2.30*
うつ傾向	5.19	4.53	4.99	4.95	0.26

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

(2000) は、中学生を対象に調査を行い、いじめの被害経験のある者は、抑うつなどのストレス症状が高いことを明らかにしている。加えて、Forero, McLellan, Rissel, & Bauman (1999) は、11~15歳の児童生徒を対象に調査を行い、いじめの加害経験がある者の方が、身体的に不調を感じる頻度が高いことを示唆している。また、中学傍観が現在の「不安と不眠」及び「うつ傾向」と有

大学生における過去のいじめに関する経験と現在の精神的健康との関連

Table 8 各いじめ経験尺度と GHQ-28 の相関分析の結果 (男子)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1.身体的症状											
2.不安と不眠	.53***										
3.社会的活動障害	.27*	.33**									
4.うつ傾向	.28*	.53***	.47***								
5.中学加害	.26*	.14	.01	.28*							
6.中学観衆	.23*	.18	-.05	.21	.68***						
7.中学傍観	.26*	.37**	.07	.33**	.45***	.48***					
8.中学被害	.28*	.31**	.25*	.55***	.42**	.19	.44**				
9.高校加害	.13	.07	-.13	.16	.58***	.43***	.30**	.46***			
10.高校観衆	.14	.06	-.09	.17	.61***	.60***	.31**	.31**	.73***		
11.高校傍観	.24*	.21	-.02	.20	.47***	.41***	.42**	.45***	.60**	.79***	
12.高校被害	.23	.16	.17	.27*	.27*	.19	.19	.74***	.59**	.43**	.50***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table 9 各いじめ経験尺度と GHQ の相関分析の結果 (女子)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1.身体的症状											
2.不安と不眠	.42***										
3.社会的活動障害	.21	.51***									
4.うつ傾向	.41***	.67***	.56***								
5.中学加害	.31**	.11	.16	.25*							
6.中学観衆	.31**	.28*	.27*	.37**	.43***						
7.中学傍観	.11	.19	-.04	.39**	.32**	.45***					
8.中学被害	-.02	.02	-.00	.16	.22	.04	.30*				
9.高校加害	.09	.19	.03	.20	.21	.22	.28*	.34**			
10.高校観衆	-.01	.05	-.11	.12	.08	.17	.18	.46***	.56***		
11.高校傍観	-.07	.16	.04	.17	.05	-.00	.29*	.32**	.68***	.50***	
12.高校被害	-.15	-.00	.12	.08	-.05	-.11	.10	.35**	.27*	.29*	.44***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table 10 男女別の各いじめ経験尺度と GHQ-28 の重回帰分析の結果

各いじめ 経験尺度	GHQ-28			
	身体的症状 β	不安と不眠 β	社会的活動障害 β	うつ傾向 β
男子				
中学傍観		.37**		
中学被害	.28*		.39**	.55***
高校加害			-.31*	
R^2	.08*	.14**	.14**	.30***
Adj R^2	.06*	.13**	.11**	.29***
女子				
中学加害	.31*			
中学観衆		.28*	.27*	
中学傍観				.39**
R^2	.10*	.08*	.07*	.15**
Adj R^2	.08*	.06*	.06*	.14**

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$ β : 標準偏回帰係数

R^2 : 決定係数 Adj R^2 : 自由度調整済み決定係数

意な正の関連を示した。これらの関係は全て相関分析においても有意であった。以上から、いじめを目撃するという経験のみにおいても、精神的健康に関連を示す可能性があり、いじめが二者間だけでなく、周囲の人々の精神的健康にまで長期的に関連を示す可能性が示唆された。

中学校時代に傍観経験のある者が多く、また、傍観経験のある者の中には、いじめに介入しなかったことを後悔している者がいることが指摘されている(桂田, 2000)。Roese et al. (2009) は後悔が精神的健康に関連を示すことを明らかにしている。以上の知見から、中学校在籍時のいじめ傍観経験がいじめを目撃したまま介入しなかった後悔により、現在の精神的健康に関連を示した可能性がある。

以上から、中学校在籍時において、いじめ被害経験のある者だけでなく、いじめ加害経験やいじめ傍観経験のある者にまで、精神的健康に長期的な関連を示す可能性

大学生における過去のいじめに関する経験と現在の精神的健康との関連

がある。そのため、いじめが発生した場合に、被害者だけでなく、加害者や周囲の人々にまで対応を行う必要性が考えられる。

しかし、高校在籍時のいじめ経験は、全て重回帰分析では有意ではなかった。この結果について、高校在籍時の各いじめ経験尺度は、全体的に得点が低く、標準偏差も小さい傾向にあったことに起因している可能性がある。

過去のいじめ経験及び精神的健康の性差

性別によって、過去のいじめ経験の得点に差が生じているかを検討した結果、中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ経験は総じて、男子の方が女子より得点が有意に高いという結果が得られた。この結果については、文部科学省(2019)の、中学校及び高校において男子の方が女子よりもいじめの認知件数が多いという報告と一致している。しかし、本研究は、各いじめ経験尺度を単次元として扱ったため、今後、項目を増やすことで、多因子の尺度を構成できる可能性があり、そのような尺度を使って調査を行えば、因子ごとに性差が見られる可能性がある。

性別によって、現在の精神的健康の得点に性差が生じているかを検討した結果、「社会的活動障害」のみ有意な差が示され、男子の方が女子よりも有意に高いという結果が得られた。これは、中川・大坊(1985)の結果と一致する。

男女別の過去のいじめ経験と現在の精神的健康の関係

中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ経験と精神的健康の関係について、男子では、重回帰分析の結果、中学傍観は現在の「不安と不眠」と、中学被害が現在の「身体的症状」「社会的活動障害」「うつ傾向」と有意な正の関連を示した。また、高校加害は現在の「社会的活動障害」と有意な負の関連を示した。これらの関係は、高校加害以外、相関分析においても有意であった。しかし、それぞれの関係について女子では相関分析においても重回帰分析においても有意ではなかった。以上から、男子は女子と異なり、中学校在籍時にいじめ被害経験があるものほど、現在の「身体的症状」「社会的活動障害」「うつ傾向」に長期的な関連を示す可能性がある。加えて、中学校在籍時にいじめの傍観経験がある者ほど、「不安と不眠」に長期的な関連を示す可能性がある。

一方、女子では、重回帰分析の結果、中学加害が「身

体的症状」と、中学観衆が「不安と不眠」「社会的活動障害」と有意な正の関連を示した。また、中学傍観が「うつ傾向」に有意な正の関連を示した。これらの関係は相関分析においても有意であった。しかし、これらの関係において、男子では中学観衆以外は相関分析において同様に有意であったが、重回帰分析では有意ではなかった。以上から、女子は、男子とは異なり、中学校在籍時のいじめ加害経験が「身体的症状」に、中学校在籍時のいじめ観衆経験が「不安と不眠」「社会的活動障害」に長期的に関連を示す可能性がある。加えて、中学校在籍時のいじめ傍観経験が「うつ傾向」に長期的に関連を示す可能性がある。

このように、中学校在籍時及び高校在籍時のいじめ経験と精神的健康の関係には性差が認められた。Slee(1995)は、男女別にいじめの被害経験及び加害経験と精神的健康との関連を男女別に検討し、男子は、いじめ被害経験が「社会的活動障害」「抑うつ傾向」に正の関連を示し、いじめ加害経験が精神的健康全般に関連を示さなかった一方、女子は、いじめの加害経験が「身体的症状」に正の関連を示唆している。坂西(1995)は、女子より男子の方が、過去のいじめ被害体験が強いほど、身体に不調を感じる人が多いことを明らかにしている。本研究で得られた結果は、これらの知見と符合しており、男子は過去のいじめ被害経験が「身体的症状」「社会的活動障害」「うつ傾向」に関連を示し、女子は過去のいじめ加害経験が「身体的症状」に関連している可能性が示唆された。

加えて、桂田(2000)は、過去にいじめを傍観していた者の多くが、いじめに介入しなかったことを後悔していることを示唆している。Roese et al.(2009)は、後悔は男女共に不安や抑うつといった感情に関連を示すことを明らかにしている。以上を踏まえると、男女共にいじめ傍観経験によって、後悔が生じ、不安や抑うつといった精神的な面との関連を示した可能性がある。そして、女子は、いじめ観衆経験が「不安と不眠」「社会的活動障害」に関連を示していた。藤沢(2020)は、観衆の中には加害者とほぼ同じ意識を持っている者がいることを述べている。また、女子の場合、いじめの加害経験が「不安」「社会的活動障害」に正の関連を示す(Slee, 1995)という知見を踏まえると、いじめの観衆経験を持つ者が加害者とはほぼ同様の意識を持っているために、「不安と不眠」や「社会的活動障害」に正の関連を示した可能性

大学生における過去のいじめに関する経験と現在の精神的健康との関連

が考えられる。

なお、男子において、重回帰分析の結果、高校在籍時のいじめ加害経験が「社会的活動障害」と負の関連を示した。唐 (2018) は、攻撃行動が高い人の中には、向社会的行動の高さや社会的スキルを持ち合わせた者も一定数以上存在する可能性を示唆している。そのため、以上の知見と本研究の結果は、符合するものであり、男子の場合、いじめ加害経験が「社会的活動障害」と負の関連を示した可能性があると考えられる。しかし、先述したように、高校生のいじめ経験尺度の得点は低く、標準偏差も小さい傾向にあったため、いじめ加害経験尺度と「社会的活動障害」との関連については、参考結果として示すに留める。

まとめと今後の課題

本研究は、大学生への回顧法を取り入れ、中学校及び高校に在籍していた当時のいじめに関する経験と大学に在籍する現在の精神的健康との関連を検討することを目的とした。その目的を遂行するために、大学生に回顧法を用いて、中学校在籍時及び高校在籍時のいじめに関する経験と大学生の現在の精神的健康との関連を分析した。加えて、性差の観点からも分析を行った。その結果、中学校在籍時のいじめ経験がそれぞれ大学生の現在の精神的健康と異なる関連を示すことが明らかになり、その関係性について男女別の特徴を見出すことができた。これまで、いじめの被害経験・加害経験のみではなく、いじめの観衆経験・傍観経験にまで焦点を当てて長期的な関連を検討した研究はほとんどなされていなかった。そのため、過去のいじめ経験が立場・性別によって精神的健康に異なる関連を示したことは本研究の一定の成果である。

しかし、本研究には以下のような課題が残されている。

第1に、本研究では、いじめ経験の程度のみに着目したため、いじめ経験によって受けた心身の苦痛が精神的健康にどのような関連を示すのかという問題まで検討できていない。今後、検討を要する。

第2に、本研究では、過去のいじめ経験と精神的健康の長期的な影響を検討した。しかし、重回帰分析における決定係数は有意でありながらも低く、大学生の精神的健康に影響を与える要因には、他の要因が関与している可能性がある。なお、本研究では、各いじめの経験と精神的健康との関連を後悔の観点から推察したが、本研究

の調査では後悔を扱っていない。そのため、今後、過去のいじめ経験と精神的健康の関連に関して、後悔などの他の要因との関連について検討する必要がある。

引用文献

- Copeland, W. E., Wolke, D., Angold, A., & Costello, E. J. (2013). Adult psychiatric outcomes of bullying and being bullied by peers in childhood and adolescence. *JAMA Psychiatry, 70*, 419-426.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development, 66*, 710-722.
- Forero, R., McLellan, L., Rissel, C., Bauman, A. (1999). Bullying behavior and psychosocial health among school students in New South Wales, Australia: Cross sectional survey. *British Medical Journal, 319*, 344-348.
- 藤沢 敏幸 (2020). いじめの心理 竹田 敏彦 (監・編)・植田 和也・上村 崇・船津 守久・藤沢 敏幸・衛藤 吉則・中島 正明 (編) いじめはなぜなくなるのか (pp.53-63) ナカニシヤ出版
- 本間 友巳 (2008). いじめ臨床——歪んだ関係にどう立ち向かうか—— ナカニシヤ出版
- 桂田 恵美子 (2000). 大学生のいじめ/いじめられ経験 比較文化, 6, 154-166.
- 松本 圭・伊丸岡 俊秀・近江 政雄・鶴谷 奈津子・石川 健介・渡邊 伸行 (2014). 過去のネガティブ・ポジティブなライフイベントが大学生の現在の精神的健康に及ぼす影響 心理学の諸領域, 3, 21-29.
- 三島 浩路 (2008). 小学校高学年で親しい友人から受けた「いじめ」の長期的な影響——高校生を対象にした調査から—— 実験社会心理学研究, 47, 91-104.
- 水谷 聡秀・雨宮 俊彦 (2015). 小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情と Well-being に与える影響 教育心理学研究, 63, 102-110.
- 文部科学省 (2019). 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果について Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/10/25/1412082-30.pdf (2020年8月15日)
- 森田 洋司 (2010). いじめとは何か——教室の問題, 社会の問題—— 中公新書
- 森田 洋司・清水 賢二 (1994). いじめ——教室の病—— 金子書房
- 中川 泰彬・大坊 郁夫 (1985). 日本版 GHQ 精神健康調査票
- 教育デザイン研究第12巻 (2021年1月) 74

大学生における過去のいじめに関する経験と現在の精神的健康との関連

手引 日本文化科学社

岡安 隆弘・高山 巖 (2000) . 中学校におけるいじめ被害者およびいじめ加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.

Roese, N. J., Epstude, K., Fessel, F. Morrison, M., Smallman, R. & Summerville, A. (2009) . Repetitive regret, depression, and anxiety: Findings from a nationally representative survey *Journal of Social and Clinical Psychology*, 28, 671-688.

坂西 友秀 (1995) . いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.

Sigurdson, J. F., Wallander, J., & Sund, A. M. (2014) . Is involvement in school bullying associated with general health and psychosocial adjustment outcomes in adulthood? *Child Abuse & Neglect*, 38, 1607-1617.

Slee, P. T. (1995) . Bullying: Health Concerns of Australian Secondary School Students *Internal Journal of Adolescence and Youth*, 5, 215-224.

唐 音啓 (2018) . いじめ研究における加害者像を再考する——加害者が持つ向社会性に注目して—— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 58, 417-425.

YNU Repository Advanced published date: November 10, 2020